

富岡日記

和田 英 著

ここ数年の国による教育に関する様々な見直しには、大きな改革のうねりが見えてきた感がある。その第一波として、今期の学習指導要領改訂は、グローバル社会に対応した「生きる力」と「知識基盤社会」をベースにした教育を示した。

わが国政府は、今日の社会の変革期に強いリーダーシップで国政を担っているが、その基礎的な部分が教育であろう。そのことから教育改革は喫緊の課題である。

ところで、「富岡日記」を綴った和田英をご存じだろうか。安政4年に信州松代藩士の娘として生まれ、明治6年15歳で官営富岡製糸場の伝習工女となり、後に日本初の民営器械製糸場などの技術教師、製糸教授となった人物である。社会の大変革期に遭遇し、明治の新たな時代を力強く生き抜いた一人の女性である。

「富岡日記」には、初めて富岡製糸場を目の当たりにしての驚きを次のように綴っている。「富岡御製糸場の御門前に参りました時は、実に夢かと思えますほど驚きました。生まれまして煉瓦造りの建物など希に錦絵位で見ればかり、それを目前に見ますこととありますから無理もなきことと存じます。」また、伝習工女としての強い使命感として、「何を申しましても国元へ製糸工場が建ちますことになって居りますから、その目的なしに居る人々とは違います。」と強い決意が伺える。操場(繭の糸取り場)での他地域の工女との関係は「一行の人々も皆負けることは嫌でありますから、……何業でも同じこととありますが、負けぬ気が第一かと存じます。」として競い合い、作業場の改善の提案などリーダーとしての力量がほとぼしる。また、「あなたでもお国へお帰りになれば先生だ。」

と言われたことに恥じて作業の上達に発憤する。

以上は「富岡日記」からの一部引用である。自ら新しき事に目覚め、単なる情熱だけではなく目標・目的に対する強い使命感を持ち、挑戦し、自己の資質・能力の向上に励む姿が浮かんでくるようだ。

日記には、お雇い外国人技師のポール・ブリュナの家族や皇太后陛下皇后陛下御行啓の様子、蒸気元釜のトラブルなどを女性の立場から詳しく記述している。明治初頭の女性を紹介した資料は少ないが、国のために志願して工女となり、気高く、高邁に振る舞う当時の女性像を知るためには参考となる。

日記に尾高様とあるが、富岡製糸場の初代工場長の尾高惇忠のことである。尾高は洪沢栄一の従兄弟で論語を教えた人物である。また、富岡製糸場のシンボルであるレンガ造りの倉庫は、深谷市(現在)のレンガ職人を呼び寄せて建築したものである。また、当時の東京駅舎のレンガは深谷の日本煉瓦製造会社から輸送されている。その日本煉瓦製造会社は洪沢栄一が設立している。このように歴史は、地域に様々に関わり産業の発展へと導くのである。

和田英の若き時代は、江戸幕府から明治政府に移った時期である。今日までの社会の変化を私なりに概観すると、明治・大正のキャッチアップ時代、昭和の工業化時代、そして今日は情報化時代に移った変革期である。経済60年周期を唱えた学者がいるが、明治から数えて3周期目に当たるのも偶然ではない気がする。

和田英の時代と同様に今日の変革期にこそ若者は先達から学び、明治初期のエネルギーな前向きな志が強く求められる。決して古き時代の話と片付けるべきではない。

この日記は、当時の富岡製糸場内を工女の立場から見た第一級の資料といえよう。

(筑摩書房、191頁、680円) (田中正一)